

# 不死の薬

小川未明

青空文庫



ある夏の夜でありました。三人の子供らが村の中にあつた大きな木の下の下に集まつて話をしました。昼間の暑さにひきかえて、夜は涼しくありました。ことにこの木の下の風があつて涼しゆうございました。

赤く西の山に日が沈んでしまつて、ほんのりと紅い雲がいつまでも消えずに、林の間に残つていましたが、それすらまつたく消えてしまいました。夜の空は深い沼の中をのぞくように青黒く見えました。そのうちに、だんだん星の光がたくさんになつて見えてきました。

「さあ、またなにかおとぎ噺をしようよ。」

と乙がいいました。

「今日は丙の番だよ。」

と甲がいいました。

この三人は同じ村の小学校へいつている、同じ年ごろの少年で、いたつて仲が

よく、いろいろの遊びをしました。この夏の晩には、このかしの木の下にきて、自分らが聞いたり、覚えていたりしているいろいろのおとぎ噺をしまして遊びました。

このとき、かしの木の葉が、さらさらといつて、青黒いガラスのような空で鳴りました。三人はしばらく黙っていました。乙が丙に向かつて、

「さあ君、なにか話してくれたまえ。」

といいました。

三人の中のもつとも年下の丙は、空を見て考えていました。このとき、遠く北の方の海で汽笛の音がかすかに聞こえたのでありました。三人はまたその音を聞いて心の中いろいろな空想にふけりました。

「さあ話すよ。」

と丙はいった。そのりこうそうな黒いかわいらしい目に星の光がさしてひらめきました。

「ああ、聞くよ、早く話したまえ。」

と甲も乙もいきました。

丙は、つぎのような話をしました。……

昔、支那に、ある天子さまがあつて、すべての国をたいらげられて、りつばな御殿を建

てて、榮譽・榮華な日を送られました。天子さまはなにひとつ自分の思うままにならぬものもなければ、またなにひとつ不足というものもないにつけて、どうかしてでき得ることなら、いつまでも死なずに、千年も万年もこの世に生きていたいと思われました。けれど、昔から百年と長くこの世の中に生きていたものがありませんので、天子さまはこのことを、ひじょうに悲しまれました。

そこであるとき、巫女を呼んで、どうしたら自分には長生きができるだろうかと問われたのであります。巫女は秘術をつくして天の神さまにうかがいをたてました。そしていいましたのには、これから海を越えて東にゆくと国がある。その国の北の方に金峰仙という高い山がある。その山の嶺のところ、自然の岩でできた盃がある。その盃は天に向いてささげられてある。星が夜々にその山の嶺を通るときに、一滴の露を落としてゆく。その露が千年、万年と、その盃の中にたたえられている。この清らかな水を飲むものは、けつして死なない。それは世にもまれな、すなわち不死の薬である。これをめしあがれば、けつして死ということはない、天子さまに申しあげたのであります。

「君！ 金峰仙って、あの山かい。」

「おつ、乙は、あちらに見える山の方を指して丙に問いました。」

「ああ、あの山だつて、死んだおじいさんがいったよ。」

と丙が答えました。

「君はその話をおじいさんから聞いたのかい。」

と甲が問いました。

「ああ。」

と、丙は軽くそれに答えて、また話を続けました。

天子さまは家来をお集めになつて、だれかその薬を取ってきてくれるものはないかと申

されました。みなのものは顔を見合はして容易にそれをお受けいたすものはありません。

するとその中に一人の年老つた家来があらまして、私がまいりますと申し出ました。天子

さまは、日ごろから忠義の家来でありましたから、そんなら汝にその不死の薬を取りに

ゆくことを命ずるから、汝は東の方の海を渡つて、絶海の孤島にゆき、その国の北方

にある金峰仙に登つて、不死の薬を取り、つつがなく帰つてくるようにと、くれぐれも

いわれました。

その老臣は、謹んで天子さまの命を奉じて、御前をさがり、妻子・親族・友人らに別れを告げて、船に乗って、東を指して旅立ちましたのであります。その時分には、まだ汽船などというものがなかったもので、風のまにまに波の上を漂って、夜も昼も東を指してきたのであります。

老臣は船の上で、夜になれば空の星影を仰いで船のゆくえを知り、また朝になれば太陽の上るのを見てわずかに東西南北をわきまえたのであります。そのほかはなにひとつ目に止まるものもなく、どこを見ても、ただ茫々とした青海原でありました。あるときは風のために思わぬ方向へ船が吹き流され、あるときは波に揺られて危うく命を助かり、幾月も幾月も海の上に漂っていましたが、ついにある日のこと、はるか波間に島が見えたので大いに喜び、心を励ました。

その家来は島に上がりますと、思ったよりも広い国でありました。そこでその国の人に向かつて金峰仙という山はどこにあるかといつて尋ねましたけれど、だれひとりとして知っているものがなかったのです。

その時分は大昔のことで、まだこの辺りにはあまり住んでいるものもなく、路も開

けていなかったのでありました。家来は幾年となくその国じゆうを探して歩きました。そして、ついにこの国にきて、金峰仙という山のあることを聞いて、艱難を冒して、その山にのぼりました。

「そんな年老った家来が、どうしてあんな高い山にのぼったのだい。」  
と甲が不思議そうにして丙に問いました。

「ほんとうに、あの山へはだれも上れたものがないというよ。」  
と乙は声をそろえていいました。

「いつであつたか、探検隊が登つて、そのうちで落ちて死んだものがあつたらう。それからだれも登つたものがないだらう。」

と甲がいいました。

「だけれど、その家来はいつしうけんめいになつて、登つたんだつて、おじいさんがい  
つたよ。」

と丙がいいました。

「そうかい。それからどうなつたい。」  
と熱心に乙と甲の二人が問いました。丙はまた語り続けました。



山へ登ると、巫女がいったように石の盃がありました。そしてその中に清らかな水がたまっていました。家来は携えてきた小さな徳利の中にその水を入れました。そして早くこれを携えて、国へもどつて天子さまにさしあげようと思つて、山を下りました。家来は山を下つて、海辺へきて、毎日その海岸を通る船を見ていたのであります。けれど、一そうも目にとまりません。毎日、毎日、沖の方を見ては、通る船を見ていますうちに、そのかいもなく、ふと病にかかつて、それがもとになつて、遠い異郷の空でついに死なくなつてしまいました。

## 三

「それからどうなつたか。」  
 「甲が丙に尋ねました。」

「これで、もうお話は終わつたんだよ。」

丙が星晴れのした空をながめて答えました。

「その家来は死んでしまったから、天子さまも死んでしまったんだね。」

と乙が良かったです。

「それはそうさ、天子さまも不死の薬を飲むことができなかつたから、やはり年を老つて死んでしまいなされたろう。」

と丙が良かったです。

「ばかだね、その家来は自分もその薬を飲んで、そして天子さまへも徳利の中へ入れて持つてゆけばよかつたのに。そうすれば二人とも死ななかつたろうに。」

と、乙が考えながら家来の智慧のないのを笑つていました。

「だつて、天子さまより先に飲むのは不忠と思つたかもしれななさ。」

と甲が良かったです。

三人は、かしの木の下の腰を下ろして、西南の国境にある金峰仙の方を見ながら、まだあの高い山の嶺には不死の泉があるだろうかというようなことを話して空想にふけりました。星晴れのした夜の空に高い山のとがった嶺が黒くそびえて見えます。その嶺の上にあたつて一つ金色の星がキラキラと輝いています。

三人の子供らは、よく祖母や、母親から、夜ごとに天からろうそくが降つてくるとか、また下界で、この山の神さまに祈りをささげらるろうそくの火が、空を泳いで山の嶺に上る

とかいうような不思議な話を胸の中に思い出しました。

「神さまというものはあるものだろうか。」

と、もつとも年少の丙が、たまたまなくなつてため息をしながらいいました。

「学校の先生はないといったよ。」

と、乙が教師のいったことを思い出していいました。

「先生はどうして、ないことを知っているだろう。」

と、甲が乙のいったことに疑いをはさみました。

「僕はあると思うよ。そんなら、だれがああ星や、山や、この地球や、人間を造つた

のだろう。」

と、丙が輝く瞳を星に向けて涙ぐみました。夜の風に吹かれて、かしの木がサワサワと鳴

っています。

「そして、だれがこの人間を造つたんだろう。」

と、丙が声を震わせて叫びました。

三人はしばらく黙つて、深く思いに沈んでいましたが、

「不思議だ。」

といい合あいました。  
すでに北ほっこく国の夏なつの夜よはふけてみえました。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「日本少年 臨」

1914（大正3）年9月

※表題は底本では、「不死《ふし》の薬《くすり》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年12月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 不死の薬

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>